

「2017 Korea-Japan Seminar in Dance & Information Communication」

レポートと感想

【博士前期課程 小新井涼】



2017年3月10日、韓国ソウル特別区に本校舎を置く東アジア最古の大学・私立成均館大学校にて、「2017Korea-Japan Seminar in Dance & Information Communication」が行なわれました。毎年度12月上旬に日本の明治大学にて、3月上旬に韓国の成均館大学校にて年2回行われる明治大学・成均館大学校合同研究発表会の、韓国での発表です。

今回は明治大学より6名、成均館大学校より3名の修士・博士課程の生徒がそれぞれに研究を持ち寄り、以下のプログラムで口頭発表と質疑応答が行なわれました。

- ロイド・ニュースン 〈The Cost of Living〉 に現れる映像技法に関する研究
パクユウジョン
- 中国のコンセプチュアル・アートにおける『もの』の提示
孫沛艾
- 文化的運動体としての〈アニメ〉：メディアロジー的視点から考察するアニメという現象
小新井涼
- 高齢者のための舞踊教育プログラム研究
チョソンミン
- 「阿波踊り」の変容におけるメディアの影響
小林敦子
- エンタテインメントの現在：現代社会における遊戯の〈復活〉
山口達男
- 体現化 経験を通じた ソメテック 運動 治療研究
ソンファヨン
- 「既視の街」へ
笠間悠貴
- 『曾根崎心中』の原作と改作を用いた民衆の心性比較分析について
中臺希実

- 質疑応答（生徒のみ・先生も交えて）

研究タイトルからもわかるように、舞踊や情報コミュニケーションに関する研究を中心にしながらも、実際の研究内容は多彩なものとなっています。そのため、自身の研究を初めて知る人に何をどのように・どこまで伝えるべきか工夫を要したり、質疑応答では、他の研究領域の視点から思いもよらない質問をいただけたりと、普段のゼミや近似分野の学会ではなかなかできない経験を積むことができました。

私は修士論文のテーマである「文化的運動体としての〈アニメ〉」を中心に、昨年12月の明治大学での発表、その後の修士論文作成を経て、今回の成均館大学での発表に臨みました。そのため発表資料の作成が、同時に修論の構想整理・修論作成を終えての反省にもなり、大学院内での機会とは別に、何度も自身の研究を省みることができたのもありがたかったです。その後の進路が博士課程への進学・就職のいずれであっても、資料の作成や、同時通訳を交えながらの国際的な場でのプレゼン経験は必ず糧となってゆくはずですが、修士2年の12月以降というと、各自修論作成や就活で多忙な時期ではありますが、今後は修士課程の方々にも、このような機会がありましたらぜひ積極的に参加してほしいと思いました。

また、韓国での発表の前後は、成均館大学の方々との交流や、大学周辺を探索する時間も十分用意されています。個人的にも、研究対象である日本のアニメ文化が成均館の生徒の方々や韓国の街中でどのように認識・受容されているのか、実際に見て・話してその一端を知ることができたのも、大変貴重な経験となりました。来年度以降初めて参加する方々は、普段大学院内やネット上だけでは知り得ない、生の情報に触れることのできる研究発表以外の時間も、ぜひ目一杯有効活用してみてください。

最後に、このような機会をくださった明治大学・成均館大学校関係各位へ心よりお礼を申し上げますとともに、来年度以降もこのような素晴らしい交流が継続してゆくことを心より願っております。

【博士後期課程 山口達男】



明治大学と韓国・成均館大学との合同研究発表会は2017年3月10日に3年目の開催を迎え、私は今回はじめて参加させていただきました。昨年2016年4月に指導教員である大黒岳彦先生から発表会のお話をいただき、当日に向けて準備を進めて参りました。本発表会では「エンタテインメントの現在——現代社会における遊戯の〈復活〉」というテーマで研究報告を行なわせていただきました。その際、2016年の年末に解散したアイドルグループ「SMAP」と、同年に大ブレイクしたピコ太郎の自主制作動画「PPAP」を題材として取り上げ現代の「エンタテインメント」を考察していきました。

本来、私の研究領域（監視社会論）は社会学に属するものですが、成均館大学側の参加者が芸術領域（特に舞踊）を専門としている関係もあり上記のテーマを設定しました。一見、このテーマは自分の研究とは無縁に思われますが、ふたつの理由から、私にとって重要なものとなっています。ひとつは、私自身が幼少期からSMAPの大ファンであり、SMAP解散騒動と現代社会の諸問題とを結びつけて考察したい、という至極個人的な理由。もうひとつは、博士前期課程から取り組んでいるメディア論を、自らの観点で整理したい、という学術的な理由です。特にふたつ目の理由は、本来の研究領域である監視社会論を今後展開していく上で、有益なものでした。というのも、現代における「監視」はSNSやビッグデータなどと密接に関わっているため、監視社会論にはメディア論の視座が欠かせないからです。

当日の発表では、事前に成均館側からいただいていた内容以外の質問も引き出すことができ、有意義な報告ができました。とくに、SMAPとPPAPとの対比を、マスメディアとインターネットとの対比と重ね、前者を経済的活動、後者を非経済的活動と位置づけた際、インターネット（PPAP）も経済的活動ではないのか、という質問をいただいたことは、想定通りでもありつつ、驚きもありました。なぜならば、私も当初、インターネットは非経済的というより経済的であるのではないかと考えていたことがあるからです（いま思えば未熟な考えでした）。一方で、インターネットは本来的に非経済的だ、という認識の受容が日本と韓国とで異なることに対しては、驚きを得ました。韓国ではインターネットは経済的な目的のために利用されている、というニュアンスを質問から感じたためです。

このように、本発表会では準備期間を含めて得ることが多く、私自身はじめての学外での研究発表であったこともあり、大変貴重な経験をさせていただきました。コーディネーターを務めていただいた波照間永子先生をはじめ、大黒先生、須田努先生、なによりも、

われわれを快く受け入れてくださった成均館大学の先生方・学生のみなさんには心より御礼申し上げます。ありがとうございました。